

中小企業「活路探れ」

東大阪、先進の町工場

中小企業が不況に打ち勝つヒントは――。「朝日21関西スクエア」の09年度の第4回懇談会が16日、町工場がひしめく大阪府東大阪市であった。今年度の企画運営委員で、中小企業に詳しい大西正曹・関西大社会学部教授(67)が、独自の工夫で頑張る町工場を紹介。「東大阪の過去・現代・未来」と題して講演した。(堀籠俊材)

関西スクエア



大西正曹・関大教授

凹形ナットをかぶせてねじ込むと左右から力がかかり、ハンマーでくさびを打ち込んでいくのと同じ効果を発揮する。大型構造物を支える縁の下の力持ちとして、明石海峡大橋、新幹線や原子力発電所にも使われた。従業員45人だが、協力工場への外注や下請け8社を使って年2千万

若林克彦(左)と大西正曹(右)が、凹形ナットの構造を説明している。撮影：滝沢美穂

個のナットを生産する。焦げ目が付きにくいよう底部をV字形にした卵焼き器なども開発し、アイデアマンとして知られる同社の若林克彦社長(76)は「悪いと思ったらすぐにスケッチ。いいものはその日のうちに試作してしまろ。スピードこそ命」と話す。年商は現在12億円だが、海外の販路開拓などにより、3年後には20億円に伸ばす目標を立てる。

この日訪れたもうひとつの町工場、東大阪市高井田の自動車部品メーカー「フセラシ」は、車のタイヤをとめるホイールナットでトッブシエアを持つ。東大阪の「オンリーワン企業」の代表格だ。

1933年に大阪・天王寺で創業、43年に高井田に本社を移した。グループの従業員は700人を数える。目下の悩みは、得意先の自動車メーカーが、自動車不況や円高の定着で海外生産を加速させようとしていることだ。今後はハイブリッド車や電気自動車向けの開発に力を入れる方針で、田中良太郎常務は「落ち込む分野はあるが、これから伸びるところでカバーしたい」と話す。

他社との違い、提案を 高付加価値カギ

大西教授の講演は次の通り。

東大阪が生み出す多様な製品群を表す言葉として「ロケットから歯ブラシまで」といわれる。だが、東大阪の中小企業だけでは新幹線も車も出来ない。彼らががつくっているのは部品だ。見えないところで力を発揮している。昔は東大阪は河内木綿の産地だった。戦後は、大阪の好景気と表裏一体となって歩み、松下電器産業(現パナソニック)など家電大手に部品を供給することで、特に金属加工を中心に発展した。とりわけ成長を支えてきたのが、この地にひしめく「貸工場」の存在だ。地方から出てきた職人たちが「腕一本、機械ひとつ」で創業でき、独立しやすかった。だが経済のグローバル化により、大手が海外に生産をシフト。国際的な低価格競争に巻き込まれて競争が激化し、集積度では全国一の東大阪の町工場の数も減っている。これからは「安く早く品質がいい」製品をつくるだけでは生き残れない。取引先が何を求めているのかを絶えずつかみ、他社とは違う製品を提案できる力が必要になる。ハードロック工業やフセラシのような企業がそうだ。「どんなモノができるのか」「どんな人なコトができるのか」。成長分野の医療機器や環境関連など新しい市場に出ていくには、「こんなことができる」という付加価値の高いものづくりが転換しなくてはならない。

GM業績改善 純損失100億円

7~9月期

【ニューヨーク】丸石伸一 積る前の分も含む4~6月

モコン

NECエレクトロニクス・音力発電 開発

半導体大手のNECエレクトロニクスとベンチャー企業の音力発電(神奈川県藤沢市)は、乾電池を使わないリモコンの試作機「写真」を共同開発した。指でリモコンを押す際に生まれる振動を使って発電する

で発電

き合いもあるといい、近い将来の実用化を目指している。音や空気の振動を電気に変える「振動力発電」技術に強い音力と、NECエレクトロニクスが06年12月から開発してきた。電源のオンオフ、チャンネルや音量の切り替えが、乾電池を使わずにできるという。

新社長

●セコム 前田 修司氏(まへだ・しゅうじ) 早大理工卒、81年セコムに入社、09年6月から副社長。57歳。原口兼正社長は副会長に。10年1月13日。

ハ 中小プリンタの品ぞろえを充実させる。セコムは10年1月から3月の間に公開買い付けを行い、オセの発行済み株式全株の取得を目指す。オセの08年11月期の連結売上高は29億5千万円(約3900億円)で、従業員は約2万2千人。屋外広告などを印刷する業務用大型プリンターが得意だ。